



吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉特定非営利活動法人 古川学人



『新人』に集う人々

1906年（明治39年）1月

中列左より、千葉豊治、海老名弾正、吉野作造、内ヶ崎作三郎、一人おいて小山東助。
前列右端、鈴木文治。

今年、日本労働運動の父、鈴木文治（栗原市金成出身）の没後六十五年にあたります。また来年二〇一二年は、鈴木文治が十五名の労働者と結成した労働団体「友愛会」の創立から一〇〇年を迎えます。これらを記念して、当館では企画展「吉野作造と鈴木文治」を開催しました。

この写真は、一九〇六年（明治三十九）一月、本郷教会の機関誌『新人』にたずさわる人々の集合写真です。吉野作造が二十八歳のとき、袁世凱の息子の家庭教師として清国に渡る直前に撮影されたものです。

当時、海老名弾正が牧師をつとめる本郷教会は「書生の教会」と呼ばれ、学生や青年が集まり、教会の運営や機関誌の編集にあたりました。その中心的役割を担ったのは、吉野作造をはじめ内ヶ崎作三郎、小山東助、千葉豊治など宮城県出身者たちでした。

写真当時、東京帝国大学の学生であった鈴木文治もその一人です。鈴木は、『新人』において「皓天生」という筆名を用いて社会問題に関する文章を寄稿しました。強い宗教的感化のもとに学生生活を送り、同じ信仰をもつ郷党の先輩吉野らとの関わりや大学での社会政策の講義によって、鈴木は労働運動家として歩む決意を不動のものにしました。

鈴木文治と、鈴木にとって「兄とも師とも慕う」存在であった吉野作造との交流は三十六年間にもおよびます。二人の友情はキリスト教によって強い絆で結ばれ、互いにキリスト教人道主義の立場から労働者の人格尊厳、地位向上を訴え続けました。

（企画展の紹介は次頁）